等は皆之を回鶻族と見るに於て一致せり。而して余も後者の說く所を認め、別にまた金史に「大定中（一一六〇―一一九〇）回鶻移習覽三人至西南招討司貿易、自言本國回紇鄒括蕃部、所居城名骨斯訛魯朶、俗無兵器、以田爲業、所獲十分之一輸官、耆老相傳、先時契丹至、不能拒、因臣之」（粘割韓奴傳）と見え、而して骨斯訛魯朶（フスオルド）（卽ち本文の虎思斡魯朶）は亞剌比亞史家のいふベラサグンに外ならざるべきこと、既に學者の認むる所なれば、大石の侵入の際ベラサグンに據りしものは回鶻にして、從つて諸學者の說と相待ちてイレク・カン家なる者は回鶻族なりしことを認むるに足るとなすものなり。されば大石が北庭より書を遣はしたる回鶻なる者は此れ等の中の何れなりしか今俄かに定めがたきが如し。もとより大石の欲する所は、其の書中に見ゆるが如く、西の方大食に至らんとして、之が爲に道を假らんことを請へるものなれば、甘肅地方のものを指せるに非ざるべきは甚だ明らかなるが如きも、然も書中曰ふ所によれば「昔我皇帝北征過卜古罕城、卽遣使至甘州、詔爾主烏母主曰云々」と見ゆ。此のことは舊五代史及び遼史に、遼の太祖の天贊三年に使を遣はして回鶻の烏母主可汗を諭したりと記せるものにして、もとより誤らざる事實なり。然も烏母主なるものは甘州回鶻の可汗にして、高昌、或はイレクカン家の回鶻の祖先には非ず。されば此の文によれば、こゝに歸服を諭すに至りし回鶻は、甘州地方のものなりとも認め得らる。實にブレットシュナイデル氏は明らかに之を以て甘州の回鶻を指せるものなりとせり（Mediæval Researches. vol. I, p. 119）。されど北庭より西せんとする大石が何の要ありてか甘肅の回鶻に書を遣はして道を假るべきや、もとより此の回鶻は北庭と大食との間、大石の西征の道途に據りしものか、若しくは其の地方に勢力を占めたるものならざる可らず。書中太祖と烏母主との應酬を敍するものは、此の地方の回鶻を以て甘州回鶻の後と思料せしか、或は然らずとするも、互ひに同族のこと